
東方心舞踏

愚者のタロットカード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方心舞踏

【Nコード】

N7586X

【作者名】

愚者のタロットカード

【あらすじ】

突如幻想郷に謎の霧が発生する事件が発生した。そして霧が深まることによって発生する怪異と妖怪とも異なる異形。そしてその異形達によって起こされる異変に霊夢は解決へと向かい出す。その胸に授けられた力を胸に。仲間達と共に未来を勝ち取る為に。

Act・00 予兆（前書き）

この小説は東方プロジェクトとペルソナ4のクロスオーバーです。
この作品には以下の注意事項があります。

- ・登場人物はほぼ東方side。ペルソナ4のごく一部のキャラの登場を除けばペルソナ4の設定を東方プロジェクトの世界に持ち込んだ、という形になります。

- ・東方側のあるキャラがペルソナ4に関わっているなどの設定もございません。

- ・霊夢がワイルドに覚醒します。

- ・霊夢のコミュは作者の独断と偏見で決定しています。

- ・霊夢の他にペルソナ使いとして覚醒する人もいます。

- ・時系列を弄っている為、ペルソナ4の本編終了後の半年後の秋頃に風神録が発生しています。

- ・そしてこの小説の時期は聖蓮船終了から少し経った後です。

- ・設定上、早苗は霊夢より1才年上の設定です。

以上の設定で構わない、という方は良ければ本編をお楽しみください。

Act・00 予兆

私達は、常に願いながら生きている。

生きること。目的を達成する事。存在の意味を見いだす事。

私たちは生きる。過去を、故に今を。そして未来を。

生きるという事は道を歩み続ける事他ならない。私たちの歩いた道が軌跡となり残る。…そして、その軌跡は物語となる。

語りましょう。とある物語を。そしてどうかこれが過去の礎となり、今を思い、未来へ繋がらん事を切に祈る。

彼女の、彼女たちの人生を共に見守ってきた彼女の友人としてのこの書を残す。

著者 パチュリー・ノーレッジ

* * *

「——お目覚めですか？」

唐突に耳に届いた声。それと同時に一気に体の感覚が様々な情報を伝えてくる。

鼓膜を震わせるのは何者かの声だけではない。水の音だろうか。他にも僅かに何かが揺れるような感覚がある。

目を見開く。だがどこか薄暗い。…いいや、薄暗いというのは違うか。淡い光に照らされ視界に困る事はない。何とも言い難い幻想的な場所だ。内装はどうにも洋風で自分が視線を横に向ければ窓がある。大きな窓だ。外を見渡せるようだ。

そこには何とも形容しがたい、闇とも言えない空間が広がっている。どうやらこれは船のようで、それはゆっくりと水を切りながら前へと進んでいるようであった。

これで自分が今、どこにいるのかがなんとなくわかった。まるで船の中に洋風の酒場、と言い表すべきか。雰囲気と現状を鑑みるにそう称すのが正しいと思われる。

そして自分は座っている。一人用の、そう、友人の吸血鬼の屋敷にあるような豪勢な椅子だ。自分はその椅子に背を預けて座っている。その間にはテーブルが1つ置かれていて、その向かいには一人の老人が座っている。

「ようこそ」

「……はあ」

歓迎しているだろう老人に対して私の反応は随分と淡泊したものだっただろう。その淡泊な反応に対して老人は表情を変える事はない。ただ笑っている。そう、笑っているだけだ。

最初からそんな顔。まるでそう言わんばかりの表情。それがどうにも作り物に見えてしまうのは何故なのか。そしてだからといって

それが不愉快にならないのもまた不思議だ。知り合いの人形遣いの人形とは違うのにどうにも憎めない。好きにもならないが。そして何より一番気になるのが……。

「…随分立派な鼻ね」

「これは至極光栄でございます。これは私の自慢でもありますからな」

従者からも高評価でございます、とその立派な鼻を僅かに撫でながら世間話をするように話題に乗る老人。僅かに、くすつ、と私の口から笑い声が零れる。

「…で？ 貴方誰かしら？ ここはどこ？ …これ、私の”夢”で良いのよね？」

「おや？ 今度のお客様は随分と勘が冴えていらつしやると見えるええ。ここは貴方様の夢でございます。そしてここはベルベドルーム。意識と無意識の狭間。故にご就寝の所、ここにお招きさせて頂きました。…失敬。名乗りを忘れていましたな。私の名はイゴール。このベルベドルームの管理をさせて頂いております」

「…イゴール、ね。意識と無意識つて、また地底のアイツが関わつてたりするのかしら？ それに招いた、つて私に何の用よ？」

「ここはいずれ何らかの”契約”を結んだ方が本来訪れる場所。…貴方様にもそういった未来が近づいている、という事ですな」

「…契約？」

「はい。…占いは信じますかな？」

ぱつ、とイゴールと名乗る老人がまるで手品のように何もなかったところから取り出したのはタロットカードだった。

「占い、ね。知識としてはただの迷信ばかりではない事は知っているけれども…」

「けれども？」

「どうでもいいわ。おいしいお茶が飲めればね」

「ほほ。これはこれは。…未来がどうであろうとも進み続ける。己の速さで、誰に何かを言われたとしても。豪胆なお方ですな。…そんな貴方様の未来、少々覗かせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「どうぞお好きに」

では、とイゴールはタロットカードをシャッフルし、そして何かの意味があるのだろう。タロットを並べていく。ふむ、と1つ頷き、タロットを捲っていく。タロットの知識は無い為にどのような結果が出ているのかはわからない。

なるほど、なるほど、と感心したように、関心したように、感慨深げにイゴールは頷いている。私はただそれを眺めるだけだ。

「貴方様の未来は、どうやら近々、試練の時が訪れるようですね」

「試練…？」

「試練の先は…この試練において貴方がどのような思いを抱き、悩み、答えを出すのかによって大きく変わるでしょう。所詮はたかが占い、と言われればそれまでですがな」

「…興味ないわ。それにその”契約”とやらもよくわからない」

「試練は貴方様の”役割”と”貴方自身”を試されるようだ。…そして試されるのは何も貴方だけではない」

「？ それって、じゃあここにも私以外の奴が来るって事もあるの？」

「いいえ。それは恐らくないでしょう。貴方様はこの”契約”を必要とされる日が来る。それは間違いない。この場に貴方がいる事が何よりの証拠。そして貴方の試練に”契約”は必然なのでしょう。それは貴方様の役割に必要な力にして、貴方自身の試練に打ち勝つ為に不可欠な力となるでしょう」

イゴールはそう告げると同時にタロットを手の中に戻す。…まるでタロットが自動的にイゴールの手の中に戻ったように見えた。まったくもって不可思議な老人だ、と思う。だがそれに特段驚いていない自分がいるのもなんともおかしな話だ。

「しかしまだ貴方はその時ではない。しかし、再会の日はいずれ来るでしょう。…今日はこの辺にいたしましょう。…ああ、申し訳ありません。私とした事が重要な事を聞き忘れていました」

失敬失敬、と言いながら、その瞳で彼は私を見つめてくる。

「貴方の名を、お伺いしてもよろしいですか？」

私の、名前。

「――…霊夢。博麗 霊夢よ」

* * *

目が覚めた。

開いた目はまだ寝ぼけ目の事だろう。…何とも形容し難い、ただの夢とも思えぬ夢だったな、と思いながら体を起こした。

「…ねむ…」

寝た気にならない。体は寝る事によって疲れは取れている筈だが、頭だけが嫌に覚醒しているような感覚だ。寝ていた、というのは意識もまた休める事なのだからもしもあれが夢の中で本当にあった事だと言うのならイゴールと名乗った老人には文句の1つも言っていきたい。

「…はあ。しかし、あれが本当なら…また異変が起きるのかしらね？」

布団から這い出る。そのまま立ち上がり、外と内を遮っている障子の元へと向かう。障子を開いて外の景色を目に移す。外は朝霧が出ていたようだ。どうにも霧の所為で遠くが見えない。

ここまで深い霧は初めて見るな、という感想を抱きながら私は夢の内容に思いを馳せた。イゴールが言っていた言葉が本当ならば近々、異変が起きるのだろう。

「…しかし、契約って何なのよ。あんな得体の知れない奴に力を授からないと解決出来ない異変でも起きるっての…？」

* * *

何かが地に叩きつけられる音が響く。

鈍く、生々しいその音は聞くだけで痛々しい。そして叩きつけられた者の惨状も見るからに酷い。それは女性。本来は美しい顔も泥や血によってその美貌を損なっている。全身に至る所に傷があり、身に纏っている衣装も泥と血で汚れ、見るも無惨なまでにぼろぼろ

となっている。

この光景を見る者がいれば目を見開く事だろう。そのぼろぼろにまで痛めつけられているのは……。

「ぐ、ほっ…！　ぐ…は、あ…はあ…！」

『無駄な抵抗はよせ』

起き上がろうとした女性をまるで窘めるように声をかけるのは不気味な声音だった。その声に抗おうとするかのように女性は立ち上がろうとするも、既に彼女の体は限界なのだろう。起き上がる事は叶わず、再び地に伏せる。

『お前では私には勝てない…』

「ぐ…う…！　き、さ…ま…！」

『私の力はお前と同種。そして、私の力は単純にお前よりも上だ。そして…』

霧が広がっていく。辺りを包み込むかのように。まるで世界を塗りつぶしていくかのように。

『この隙間の無い霧の中ではお前の力も半減しよう。隙間を開いて逃げるか？　そんなことは出来ない。私は確かにお前の脅威であり、放置する事は出来ない。しかし挑んだ所でお前では私には勝てない。仲間を呼ぶか？　私が許さない。お前の未来は定められている』

「ふざけた…事を…！！」

『あまり傷つけさせるな。… 楽にしてやろっ』

霧が、深くなっていく。

「…う、あ…」

深くなっていくにつれて霧の他に黒い靄が溢れ出していく。それが女性の体にまわりつくように寄っていく。何とか身を振り、逃れようとするもその抵抗はあまりにも儚い抵抗にしかない。

「…ごめ…ん…なさ…い…」

何に対しての謝罪だったのか、女性は最後に心底悔しそうに、心底申し訳なさそうにその一言を零してゆっくりと崩れ落ちた。崩れ落ちた彼女を取り込むかのように黒い靄は広がっていく。

『忘れ去られた幻想の地よ。外たる世界は示した。人の可能性を。… 停滞せしこの世界は価値があるのか？ その存在を証明せし者は現れるのか…？』

* * *

「霧」

ぼつりと、小さく呟く。

手に持っていた筭の手は止まってしまった。やはり気になってしまふのだ。霧を見ると。昔を思い出してしまふから。

「…もうとつの昔に終わってる話でしょうに…」

はぁ、と吐息を1つ吐き出して筭を抱える。筭をいつもの場所において家の中へと戻る。

「早苗。もう掃除が終わったのかい？」

名を呼ばれて私は顔をあげる。そこには私の住まう家、守矢神社で祀られている神様である神奈子様がいらした。どこか顔色を伺うように僅かに屈んで私を見ている。それに私は安心させるよう

に笑みを浮かべて返す。

「ええ」

「今日は霧が出ているから冷え込むな…風邪を退かないようにな？」
「大丈夫ですよ。神奈子様」

小さく笑って私はそのまま歩を進めた。それに後ろで神奈子様が僅かに吐息を零した後、着いてくるのがわかった。
さて、これから何をしようか、と私は今後の予定を考えながら今へと向かうのであった。

* * *

…全ては霧に沈む。

彼女の旅路の果てに、どのような”答え”が待つのか。
答えを知る者は…まだ誰もいない。

「…始まりますかな。試練の時ですな。幻想の民…かの者たちは試される。その存在の意義と証明をかけて…。手始めに目覚められる

のは…やはり貴方ですか」

手に握られたタロットカードが一枚。そこに握られていたのは…
…。

「…”愚者”でございますな」

物語が、始まる。

A c t ・ 0 1 覚醒（前書き）

注意

霊夢のペルソナは女神転生の方で名前が同じ神がいるようですが、グラフィックは大きく異なります。これもまた作者の独断と偏見によるイメージから出来上がっています。

Act・01 覚醒

「…今日の霧は随分と濃いわね」

茶を啜りながら霊夢は今から外を見ながら小さく呟いた。掃除するにしてもこの霧の所為で視界を遮られる為になかなか捗らなかった。掃除を断念し、後はいつも通りに茶を啜っているのだが、どうにも引つ掛かる。

「…霧って言えば、レミリアの異変の時を思い出すけど…それともなんか違うな」

気にしていなかったが、この霧は普通の霧ではない。だが害意がある霧ではない。ただ自然発生したというよりは発生させられた霧、という感覚に近い。その力があまりにも朧気だから気づかなかったが、長いこと霧に触れている事によって霊夢の感覚はその差異を捉えていた。

「…参ったわね。あんな夢見るし。何かの前触れとも言いたいのかしら？」

「何が前触れなんだ？」

霊夢の独り言に答えるように声が響いた。よっ、と気軽に声をかけてきたのは黒い衣装に白いエプロンドレス、そして黒の三角帽子

を被った少女だった。

「魔理沙」

魔理沙、と呼ばれた少女はにっ、と笑みを浮かべている。この短いやり取りの間に二人の気さくな色が見える事から二人は旧知の仲だとわかるだろう。事実、この二人は旧知の友人なのだから。

「この霧、やっぱり変だよな？　ここまで深い霧だとレミリアを思い出さず。色は違うけどな」

「そうね。これはごく自然発生した霧と何も変わらないわよ。…けど、何かの力が加わってる。直接的な害はないけど、あまりにも力が小さいから読み取れないし、どんな効能があるのかはわからないわ。今のところわかるのは見渡すのが少し不便なだけ、って話」

「だよな。参ったぜ、こんなに霧が深いと私も速度出して飛べないんだぜ」

「安全運転しろ」

にべもなく霊夢は魔理沙を切って捨てる。たまにはな、と軽い調子で返す魔理沙はカラカラと笑っている。

「霊夢、私にもお茶」

「…本当に厚かましいわね。勝手に煎れなさい」

「許可は貰ったんだぜ」

呆れたように溜息を吐き出す霊夢に魔理沙は気にした様子もなく自分の分のお茶を用意しだす。

まったく、と呟きを零し、霊夢がお茶を啜ろうとした瞬間だった。霊夢は湯飲みを口に運ぼうとした手を止め、一度湯飲みをテーブルの上において立ち上がった。

「…魔理沙。茶は後よ」

「あん？」

「招かれざる客よ」

魔理沙にそう声をかけた後、霊夢は縁側へと向けて歩を進めて外へと出る。霊夢が外へと出たと同時に霧の中から何かが浮かび上がってくる。それは仮面だ。そして仮面を被るように不定形の黒い何かが這い出てくる。

「…んだよ、あれ」

「知らないわよ。…でもわかるのは」

霊夢の隣に並んだ魔理沙が怪しむようにその仮面と黒い何かを睨む。霊夢は懐からお払い棒と破魔札を手に握りながら黒い影を睨み付ける。

「交友的ではないって事ね」

仮面を被るように黒い影は形を象った。それは鳥だった。腹に仮面を埋め込んだかのような鳥だ。鳥の足にはカンテラが握られ、ぶらぶらと不気味に揺れている。

外見こそ鳥だが、その大きさがまるで異なる。通常の鳥の2、3倍はあるつかというサイズ。そしてまるで生物とは思えないような眼が霊夢と魔理沙を見ている。

「妖怪、か？ でも見たことないぜ、こんな奴ら？」

「知らないわよ。…来るわよっ！」

霊夢の警告と共に魔理沙と霊夢は左右に飛ぶ。鳥がカンテラで二人を殴りつけるように飛翔したのだ。霊夢はそのまま手を振り抜く。霊夢の手より飛んだのは破魔札。それは巨鳥へと迫り、着弾。

「！？ 効いて、ない！？」

が、鳥はまるで意図していないかのように飛翔を続けている。霊夢に続いて魔理沙が懐から何かを取り出す。八角形の炉、魔理沙の魔法道具の1つ、八卦炉だ。八卦炉を握りしめ炉に魔力を込める。魔理沙が八卦炉を巨鳥へと向ける。そして放たれるのは色鮮やかな弾幕だ。降り注ぐように放たれた弾幕。幻想郷で一般的に広まっている”弾幕ごっこ”と呼ばれる決闘に使われる手段だ。

「！？ 私のも、効かない！？」

「魔理沙、相手はこっちに害意があると思えない！ ルール無用よっ！」

本来、弾幕ごっこは相手を殺す事を目的としていない為に威力の低減を決められている。それを相手に乗じて開放し、同じ弾幕でも強力な弾幕にする事も出来るのだが所詮は遊びのルールと言う事だろう。

現在、謎の敵に明らかな害意を以て迫られては遊びなどとは言ってられない。霊夢は自らの意識を切り替える。弾幕を楽しむ弾幕少女としてではなく、幻想郷の安定を担う”博麗の巫女”としての自分へ。

「——ハアアッッ！！」

迫った巨鳥にサマーソルトを遠慮無く叩き込む。首を折る勢いで蹴ったが、どうにも感触が重い。仰け反らせるのが限界と悟った霊夢はそのまま札を叩きつけるように投げつける。

「宝具「陰陽鬼神玉」！！」

そのまま腕を上には振り抜くようにして懷から取り出した陰陽球を投げる。霊夢の霊力を受けて巨大化した陰陽球は巨鳥を押しつぶす勢いで向かっていく。それに鳥は吹っ飛ばされるも、すぐに羽ばたき態勢を取り戻し一声を高らかにあげる。

ダメージが与えられていない訳ではない。このまま叩き込もうと

霊夢が次なる攻勢に出ようとした瞬間だった。

「ッ！？ 霊夢、増えたぞ！？」

「何ですって！？」

同時に魔理沙から焦った声が響く。振り返ればそこには2体、3体と鳥が浮かび上がってきているのが見えた。思わず霊夢は舌打ちをする。すぐさま先程の1体を倒そうと先程の巨鳥へと戻す。

——” ラクンダ ”

巨鳥と眼が合った瞬間、霊夢は言いようのない悪寒に襲われた。

霊夢の第六感とも言うべき感覚が警告を知らせている。今、攻撃に当たる訳にはいかない——ッ！！

だが、現実是非情だった。新たに現れた鳥が光を放っている。カントラの火が強く燃え上がり、鳥が甲高く声を上げた。

——” マハラギ ”

そして、火炎が霊夢と魔理沙を襲った。霊夢は咄嗟に魔理沙と並ぶように立つ。

「夢符「二重結界」！！」

霊夢のスペルカードによって展開された結界。それは霊夢と魔理沙を護る盾となる。が、重い。霊夢は歯を食いしばりながら結界の維持に意識を集中させる。火炎の直撃は防げたものの焼き付くかのような熱は消えず、霊夢の額に汗が浮かぶ。

そして火炎が消え去るのと同時に魔理沙が八卦炉を構えた。霊夢が魔理沙の意図を察して一歩後ろへと下がる。八卦炉から眩いまでの光が放たれ、魔理沙が吼える。

「お返しだぜっ！ 恋符「マスタースパーク」！！」

魔理沙の八卦炉から放たれた閃光の奔流。それは先程火炎を放った巨鳥を飲み込んでいく。鳥は回避しようと左右に散ったが遅い。魔理沙のマスタースパークが直撃し、鳥はそのまま回転するように地に落ちる。

「やったか！？」

「…まだよっ！！」

そう。まだだ。鳥は再び空へと舞い上がり、計三体に増えた巨鳥は霊夢と魔理沙を取り囲むかのように陣取る。霊夢と魔理沙は背中合わせに立ち、互いに四角を補いながら巨鳥と対峙する。

「…マスタースパークでも堪えてねえのかよ」

「ノーダメージ、って訳じゃないけど…手応えがあまり感じられないわ」

つう、と二人の頬を伝うように汗が浮かぶ。二人の緊張も無理ないだろう。一般的となっている決闘ルール、弾幕ごっこは命の危険が無い遊びではない。下手をすれば事故で死んでしまう可能性もある。

だが、決して誰もが命を奪おうと弾幕ごっこをしている訳ではない。故に、今正に自身の命を狙ってくる強者との対峙は霊夢と魔理沙にとっても経験が少ないのだ。平和な時代に生まれた事による絶対的な経験不足。

馴れぬ経験からの事柄は霊夢と魔理沙から集中力を削っていく。それは同時に体力の消耗でもあり、無言の対峙でもその間に霊夢と魔理沙は体力を削られている。

そして、無言の膠着が解かれる。巨鳥達が一気に霊夢と魔理沙に突撃を始めたのだ。二人は互いに弾幕で反撃するも、止まる気配は見られない。

「くそつ、霊夢、飛べ！」

魔理沙がその場から飛び退くように地を蹴った。霊夢も同時に地を蹴る。巨鳥はそれぞれ、霊夢と魔理沙をターゲットと定め向かってくる。霊夢に向かったのは2体。霊夢に向けてカンテラを叩きつけようと迫る。

「う、くっ！」

左右、前後より迫る巨鳥に翻弄される霊夢。反撃しようにも機会が見えない。地を転がるように敵の滑空からの攻撃を回避する。だが、それも長くは続かなかった。突如、滑空から突撃へと動きを変えた巨鳥の動きに霊夢が着いていけなかったのだ。

「!? がっ、あっ…!？」

突撃。並の鳥よりも大きい上に速度も上げられた攻撃だ。それが並の苦痛ではない事は覚悟していたが、それは霊夢の想定を超えていた。骨が軋む、内蔵にまでダメージが届いたのではないかという衝撃。

まるで、自分の体が脆くなったのではないかという錯覚。そこで霊夢は先程から消えない悪寒の正体を悟った。

（まさか、此奴等…そんな呪いみたいな芸当まで…!）

霊夢が地に叩きつけられる。魔理沙が慌てた様子で霊夢を呼ぶ声がする。衝撃によって肺の空気が全て吐き出され、霊夢は噎せ返る。同時に、喉の奥から何かが込み上げてきてその何かを吐き出した。

（…血…）

鉄の味が口内に広がっていく。それと同時に鮮明に死の恐怖が霊夢へと襲いかかった。魔理沙が自分の名を呼ぶのもどこか遠い。先程、火炎を放ったように巨鳥が光を蓄えている。

死。死が、迫る。

（私が…死ぬ…？）

死ぬ。死ぬってなんだろう、と霊夢の思考はまるでぼんやりとどうでも良いことを思った。

死ねばどうなるんだろう。自分が死んだら博麗の巫女はどうなるんだろう。幻想郷はどうなるのだろう。ましてや自分自身はどうなるのだろう。

見えない。まるで見えない。この世界を遮っている霧のように見えないのだ。今まで考えたことも無かった死の先。

何も思いつかない。死んだ後の世界を霊夢は知っている。亡霊の姫を知っている。半人半霊の友人だっている。死神も見たこともあれば、死者を裁く閻魔とも知り合いだ。死について知らない訳じゃない。死後について知らない訳じゃない。

だが、今、改めて立たされてどうだ。自分は何をわかっていたのだろうか。ただ表面的な事しかわかっていなかったんじゃないかと。

死とは——何だ？

（…消え、る）

死とは、喪失だ。

喪失。無くなる。無くなってしまう。私が、私という存在が、私という命が。

(……ああ……なんか……——嫌だな)

そう、思った。

消えたくない。

死にたくない。

何か強く望んだ事、これほどまでに思ったこと、あったかな？
そんなぼやけた思考の中、だが、滾る思いは強く、熱く。

「死に……たく……ない……」

吐き出した言葉は、重く、響き。

——我は……汝。

声が、聞こえた。

——汝は……我。

それは強く鼓動を打たせる。

——汝…己が双眸を見開きて…。

熱く、熱く。ああ、熱い。体の奥から燃えるような。

——今こそ…。

私は、生きてる。そして……！

——発せよ……！！

生き抜いて見せる……！！
故に、呼ぶべき名は”知っている”……！！

「…ペ…」

…来い。

「…ル…」

来い。

「…ソ…」

来い…！

「…ナ…！！」

——来いッ！！

* * *

いつの間にか立ち上がっていた。自身から立ち上るのは青白い光だ。足下には何か模様が浮かび上がっている。魔理沙も、巨鳥達もまるで驚いたようにこちらを見ている。

手と見た。掌の上でくるり、くるりと回る一枚のカードがある。

それは0番。”愚者”を示すタロットカード。吐息を零す。その吐息が熱いを感じる。私はきつと高揚しているのだろう。

その熱く迸る衝動に任せるままに、私はその愚者のタロットカードを握りつぶした。

言った。

我は汝。汝は我と。

ならば私は貴方で、貴方は私だ。

故に名を、呼ぼう。その証だ。

だから来い。ここに来たれ。いざ来たれ。

来たれ…！ 私の”力”にして”写し身”よ…！！

「アラハバキ！！」

霊夢の背後より光と伴って現れたのは古風な和装を纏う仮面をつけた女性。長い艶のある黒髪を靡かせ、仮面に隠されていない僅かに見える口元は笑みを浮かべている。

ここに、”アラハバキ”と呼ばれた者は確かな力となって霊夢の呼びかけに答えた。

「…さあ、行くわよ」

ただ静かに。しかし確かな手応えと確信を以て霊夢は相対せし敵を睨み付けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7586x/>

東方心舞踏

2011年10月21日15時04分発行